

1 Jp-6 畳空間にかかわる住様式と住意識の検討—首都圏の注文戸建住宅における—  
(第2報 住宅平面における畳空間の動向)

○川村道乃\* 今井範子\*\* 伊東理恵\*\*  
(\*鎌倉女大・非, \*\*奈良女大)

【目的】第2報では、畳室数や、畳室の位置、他の部屋への続き方、広さ等の平面の特徴と動向を、属性や生育住宅等その他の要素との関連を分析しながら明らかにする。

【方法】第1報と同じ。

【結果】畳室数は0室7%、1室57%、2室28%、3室以上8%であり、畳室1室が最も多く、畳室のない住宅が1割弱存在する。述べ床面積が大きくなるほど畳室数は増加する。核家族よりも世代家族の方が畳室数は多い傾向がある。絶対数でなく居室に占める畳室の割合でも同様である。世帯主の年代によって相違が見られ、30代では畳室のない世帯が2割を占める。60代以上では半数以上が2室以上もつ。生育住宅との関連も見られ、就寝様式が畳室・ふとんであった場合は畳室2室以上が4割であるのに対し、洋室・ベッドであった場合1.5割で、現在の畳室数に相違が出ている。一方で生育住宅と現在の住宅とに全く関連の見られない場合も多い。他室との位置関係では、畳室1室では、独立しているより他室につながる方がやや多く、そのほとんどがLやDにつながり、個室や主寝室につながるのは5例である。独立している場合はその約8割が玄関近くに位置する。畳室2室では2室とも独立2割、1室は独立し1室は他室につながる4割強、2室とも他室につながる3割で、畳の続き間を有するのは1割である。畳室3室以上ではその6割が畳の続き間をもつ。全体では畳の続き間を有するのは8%にとどまるが、LやDに続く畳室のある世帯は55%に上る。その8割が畳室との間を開けて広く使っている。洋室の中にコーナーとして畳空間をもつ例は26あり、LやD内が15例、主寝室や個室内が11例である。複数もつ世帯も見られる。コーナーとして設けられる場合4.5畳未満が半数近い。